＜東北税理士会会長賞＞

知ると見える

浪江町立なみえ創成中学校　２年　畠山　泰稀

「なるべくなら払いたくないな。」

税に対する正直な気持ちだった。最近は様々な税が高くなっていると聞くし、将来自分も支払うことになるのか……と思うと、嫌な気持ちになった。

僕の税に対するイメージは、誰でも守らなくてはならない「国民に課せられた義務」であり、歴史の中で出てくる税はいつも「国民を苦しめるもの」という認識があった。「税は、せっかく得た給料から、ごっそり引かれてしまう嫌なもの」という考えは、実は「税が何に使われているのかを知らなかった」からこそ起こっていたということに、この作文を書き出してみて僕は気付いた。

税について調べてみると、日本には現在約５０種類もの税があることに驚いた。集められた税の使い道としては、社会保障費が最も多い。社会保障費とは、国が国民の生活を支えるために作った制度で、年金、介護、医療費、子育てなどの充実のための費用だ。

僕はこの夏、虫垂炎で入院・手術をしたのだが、窓口で支払ったのは３分の１の医療費で済んだ。支払い後、高額医療費制度を利用すれば、自己負担限度額を超えた分は払い戻しされるし、更に僕の住む町では、子供の医療費の一部負担金が免除されるので、その手続きもすれば、実質わずかな費用で医療を受けられたということになる。国民皆保険制度の無いアメリカで同じ手術を受けた場合の医療費は、３００万円とも言われているのだから、手術費用の一件は、税があるお陰で安心して生活ができる日本を実感した出来事になった。

そして、見ようと思うと見えてくるのが税だ。学校、公園、図書館、消防署、警察署、舗装された道路に信号機、ゴミ処理施設に至るまで、これら全て税が形になったものだと知ると、家を一歩出たら、「税」というものがどれだけ僕たちの生活を支えて

いるのかを理解することができた。

もし、税が無かったら、当たり前に利用している公共サービスが無くなることを意味している。医療費は全額自己負担、救急車も有料になり、医療を受けたくても受けられない人がたくさん出てくるだろう。有料の施設、公園しか無かったら、人々の交流や子供たちの元気な声も減り、警察署や警察官が減った町は物騒になるかもしれない。

今の僕は、消費税くらいしか支払う税が無いけれど、僕の支払った税もこの国を支えているのだと想像すると、税への印象が大きく変わった。「納税の義務」とは、人々を苦しめるためにあるのではなく、人々が平等に幸せになるためにあるのだと知ったから。

僕が大人になり税を納める時が来たら、この国を支える一員になったと胸を張りたい。そして願う。

文化的で安心安全なこの生活が、ずっと続くように。